

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2023年11月24日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・修士1年
氏名	鈴木百夏

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
岐阜県恵那市・中部大学研修センター
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
基礎フィールド実習でのドローン・GISを用いた調査手法の習得
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
2023年11月7日 ~ 2023年11月9日 (3日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
中部大学、杉田暁先生
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>この実習では、ドローンを扱う上で必要なことを一通り学ぶことができた。1日目はドローンを操縦する上で遵守しなければならない法律やマナー、2日目は実際にドローンの操縦を行うことでその方法を学んだ。</p> <p>この実習を受ける前までドローンに触ったことはなかったが、共同で野外調査を行っていた他大学の学生がドローンを飛ばしている場面を間近で見たことがあり、ドローンを野生動物の研究に使用できることは知っていた。しかし、その操縦方法や具体的な研究手法としての役割については、今回の実習で初めて知ることができた。</p> <p>この実習では、実際にドローンを使用した研究例を研究者が紹介する講義があり、ドローンがどのように野生動物の研究に使用されているかが分かった。この講義の中では、鯨類の目視調査の一部を自動化したりデータを取得できる範囲を広げたりするために開発されたドローンについての講義が、特に印象に残った。これまで、海棲哺乳類の目視調査を何度か行ってきたが、目視調査では、海棲哺乳類を自分の目で長時間探すことや、遠い距離にいる個体でも群れの頭数や行動を観察することが大変である。自動化されている部分はほとんどなく、人間の目で判断する要素が多いため、データの正確性や取得できる範囲に制限がある。そのため、日本鯨類研究所で開発が進んでいるドローン「飛鳥」の紹介は、非常に興味深かった。</p> <p>2日目にドローンを実際に操縦した際は、以前の調査中に他の学生が操縦している様子を見ていたときは難しそうだと感じていた操作が、意外と単純で簡単に思えた。ドローンの操縦計画を立てて、あらかじめ決められたルートに沿ってドローンを飛ばせたときは、自動的にそのルートを選んで飛ぶ、ドローンの扱いやすさに驚いた。今回はドローン操縦の技術においては第一歩となったが、誰でも練習すれば思い通りかつ安全に操縦できる点も、ドローンを使用する利点だと感じた。</p>


写真1: ドローンの準備
写真2: ドローンの操縦

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

今回の実習で最も重要だと思った学びは、現在の研究テーマに関係なく、ドローンを操縦するための知識と技術があれば、研究テーマの可能性を広げることができることが分かったことである。この講義でも、ドローンが災害、地理測量、野生動物の研究だけでなく、一般の人による様々な用途に使用できることや、簡単に誰でも購入できることを知り、今後、研究以外の場面でもドローンを使用する機会がある可能性は充分にあることが分かった。よって、この経験は、野生動物の研究において自分の視野を広げるだけでなく、将来的にも役立つ経験になった。

興味深い講義をしてくださった先生方、3日間にわたり私たちを受け入れてくださった杉田先生に、この場を借りて御礼申し上げます。

### 6. その他 (特記事項など)